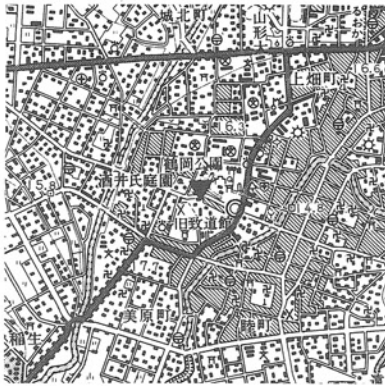


山形・鶴ヶ岡城跡（二の丸南辺地点）
つるがおかじょう

- 1 所在地 山形県鶴岡市馬場町
- 2 調査期間 一九九九年度調査 一九九九年（平11）八月～一月
- 3 発掘機関 鶴岡市教育委員会
- 4 調査担当者 眞壁 建
- 5 遺跡の種類 集落跡・城館跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代、平安時代、中世、近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 鶴ヶ岡城跡は、庄内平野南西部の赤川左岸の扇状地上に立地し、



（鶴 岡）

鶴岡市のほぼ中央部、JR羽越本線鶴岡駅から南西へ一・六kmに位置する。一帯は赤川の旧流路に伴う微高地で、標高は一七・五mを測る。
鶴ヶ岡城は、室町時代以降大泉荘大宝寺に所在したことから大宝寺城と称され

ていたが、慶長八年（一六〇三）最上義光により鶴ヶ岡城と改称された。元和八年（一六三二）最上氏改易後に信州松代より酒井忠勝が入部し、以後明治に至るまで庄内藩酒井家の居城として続いた。本遺跡の調査は、事業計画に伴い一九八七年より継続的に行なわれている。今回の調査は、都市計画街路事業羽黒橋加茂線道路改良工事に伴うもので、一九九九年度から二〇〇〇年度にかけての二カ年にわたる調査となった。

検出した主な遺構は、中世・近世の礎石建物や井戸・土坑・溝などであるが、土師器の出土した古墳時代の土坑や、平安時代の土坑・溝なども検出されている。出土遺物は、かわらけ・珠洲系陶器・瀬戸美濃系陶器・白磁・青磁・染付・肥前系陶器・伊万里青磁・木製品などである。

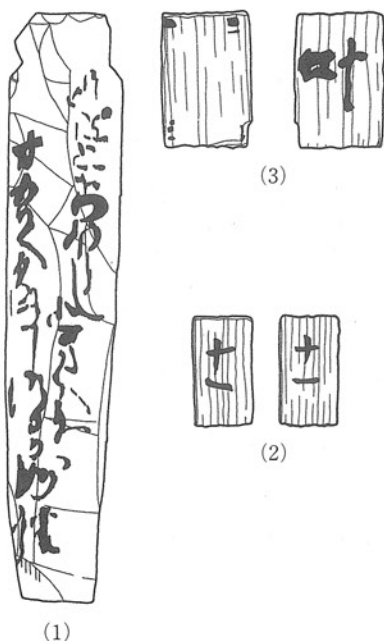
木簡は、近世以降と考えられる土取り穴から一点、試掘トレンチから二点、計三点出土した。

8 木簡の釈文・内容

試掘トレンチ

- (1) 「＜進上大ほうし巡方へ□^{〔御カ〕}廿貫文具なしつるか妙性」 210×39×3.5 032

- (2) ・「十一」
・「十一」
・「十一」 38×21×2 021



土取り穴

(3) 「 叶 」

・ □ □

□ □

47×32×3 021

(1)は、長方形の材の上端の左右に切り込みが入り、下端はややすぼまる形である。右辺の切り込みは一部破損している。形状からみて、法師へ進上する物品の付札と考えられる。(3)は裏面の四隅に墨痕があり、一から四までの漢数字を記した闘茶札の可能性がある。なお、釈読にあたっては、(1)については網野善彦氏を介して佐藤進一氏にもご教示をいただいた。また、(3)については奈良文化財研

究所の渡辺晃宏氏のご教示を得た。

9 関係文献

鶴岡市教育委員会『鶴ヶ岡城跡発掘調査報告書(二の丸南辺地点)』
(鶴岡市埋蔵文化財調査報告書一四、二〇〇一年)

(松田亜紀子)

東北地方出土の闘茶札

本号には、山形県鶴ヶ岡城跡と青森県十三湊遺跡で闘茶札と思われる木簡の出土が報告されている。闘茶札としては広島県草戸千軒町遺跡出土のもの(重要文化財。広島県立博物館のホームページで手軽に画像を閲覧できる)が著名であるが、東北地方からも闘茶札が出土していたことが、三上喜孝氏によって明らかになっている(『東北地方の闘茶札と鎌倉』(国立歴史民俗博物館『中世寺院の姿とくらし―密教・禅僧・湯屋―二〇〇二年)。宮城県瑞巖寺遺跡、山形県大楯遺跡、秋田県洲崎遺跡出土の事例である。これらは本誌紹介時にはいずれも闘茶札とは認識されていなかったものである。

今回新たに二点の事例を加えることができたわけで、今後東北地方のみでなく、全国の木簡の中から闘茶札の「発見」が期待できるかも知れない。

(渡辺晃宏)